



苦情処理屋からの脱皮を

緑政局 岸 達男

●落葉、ゴミの処理方法は●遊具の修理を、設置を●砂場に砂を●排水が詰っている●照明が暗い●樹木が繁りすぎている●害虫防除を●広場で野球をして危険である。これは毎年一回各区ごとに開催される児童公園愛護会長会議で繰り返される意見の主なものである。われわれ公園管理の第一線に立つものはそれらの対応に追われているのが現状である。

前号の行政研究「公園の管理と利用—その実態」は、公園のあり方についてわれわれの混沌とした意識を整理し、方向づけた

ものとして、今後の指針の参考となる点が多く、いわゆる「外国の公園論」と行政をつなぐ糸のように思われる。糸を綱にするか否かは、ひとえにわれわれを起点とした本市の今後の課題であろう。

ひるがえって公園の管理の現実を直視すると、前述のように物的管理に追われ、苦情処理屋に終始している面が多く、前号の行政研究でも指摘のとうり、その理想とのギャップは大きい。

旧市街地の児童公園のうち戦後の区画整理に端を発したものは、周囲の社会情勢の変化や施設の老朽化等により模様替えにさしかかっている。市民一人あたりの公園面積が少ないうえに、今後とも飛躍的な公園増加が見込まれない旧市街地では、既存の公園に対する期待が大きい。公園の模様替え時が短期的にその期待に応える一つの契機ではなからうか。

しかし、町内会を母体とする愛護会が成熟した大人で構成され、公園への要望等が時としてその人々の意見で代表されるこ

とになることは、現状の中からも予測されることである。

また公園が少ないために、その空間に種々の要望期待が集中し、結局、最大公約数的な公園、裏返せば行政研究の指摘する「児童にとって魅力のない興味の少ない公園」が繰り返されることになりはしないか。

科学的な行政を進めるためにデータバンクを

教育委員会事務局

古屋 武臣

私は学校の教材教具を中心とした教育環境整備の業務にたずさわっていますが、なにかにつけ問題となるのは、事業の質及び量のミニマムラインをどこに求めるかということ。これは社会現象としての教育の中で学校教育の守備範囲はどこまでかという問題に帰着することですが、ご承知のとおり教育に関する価値判断（教育政策）については諸説争鳴の観があり行政の目的として与えられる価値体系が錯綜する中では、前述のミニマムラインの設定は非常な困

難なものがあります。

少し唐突ですが、私は行政は科学であるという観点からこの問題をあらためて考えていく必要を感じています。近年、経済学等を代表とする諸社会科学は多大な発展をしています。その共通的手法である観察による仮設の設定・その検証の積み上げを通して市民の価値選択に提示し、個人の有害な恣意を排して私達のもつ技術を集成できたかと考えます。

一つの見方としては、法制上地方自治が制度化されてからの各自治体の苦闘は、地方行政を科学たらしめるためのそれであったとも言えます。言語が思考

へあとがき」必要性は高まっている、やるべきだという人も増えているが、問題の難しさのために具体化しにくい——というのが、「地区カルテ」「地区計画」をめぐる状況のようだ。横浜の現状に即したやり方をつくりますべきなのだろう。この特集がひとつの素材となつて、議論が深まり、問題が進展することになれば幸いである。

の道具であるようにデータは科学としての行政の道具であることを考えますと、それぞれ三十歳を経た各自治体の各分野におけるデータと交換するためのデータバンクがあれば私達の業務を科学的手法でアプローチするのに極めて有効だと思いますがいかがでしょうか。

『調査季報』は職員が自由に意見を発表し討論する研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚程度。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

近頃、「行政研究」への投稿が増えている。この二、三号はほとんどが執筆者の側から持ち込まれたものである。とくに前号の中塚氏の「草の根の国際交流」のように、自分の仕事以外のことにも積極的に発言する姿勢を歓迎したい。自発的な研究発表の場、自由な討論の場として、本誌を大いにご利用いただきたい。〈北小路〉